

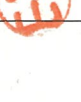


別記様式第5号（第15条関係，第23条関係）

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（経）甲第 25 号	氏 名	岡田 みずほ
学位審査委員	主査	森 保 洋	
	副査	岡 田 裕 正	
	副査	丸 山 幸 宏	
<p>題名：</p> <p>急性期病院における看護部門の効率性と職務満足に関連 －包絡分析法（DEA）を用いた効率性分析を応用した看護部門の可視化－</p> <p>論文審査の結果の要旨：</p> <p>本論文は次のように構成されている。</p> <p>第1章 序章 第2章 看護業務の可視化 第3章 包絡分析法(DEA)を用いた看護部門の効率性分析手法の構築 第4章 看護業務の効率性の経年変化 第5章 急性期病院における職務満足の現状 第6章 急性期病院における職務満足と業務効率性の関係 第7章 本論文の総括と今後の展望</p> <p>包括医療費支払い制度（DPC：Diagnosis Procedure Combination）導入以降，急性期病院における入院日数の短縮に伴う病床回転率の高まりにより，看護師の看護業務は過密化している。多くの医療機関では，看護部門による看護業務の可視化および業務改善を目的とした看護業務量調査が実施されているが，有効な改善案の提示には至らず，さらに経年的に実施されている看護業務量調査が看護業務の改善および同業務の効率化につながっているか否かの評価もできていないのが現状である。本論文では，急性期病院の看護業務量調査を用いて，看護業務の効率性を測定するとともに，その効率性の測定値の高さと職務満足の関係を明らかにすることを目的とするものである。</p> <p>本論文では，まず，DEA（包絡分析法）を用いて，看護業務量調査のみでは判明できなかった病棟間の効率性の相違を明らかにした。DEAは，ベストプラクティスを定めてベンチマークを可能にし，また非効率性の程度を評価し，その改善の道筋を求めることができる手法</p>			

であるため、業務改善の必要なポイントを絞り込むことができる。

さらに、従業員の満足度が高いことが生産性の向上につながるというサービス・プロフィット・チェーンモデルを参考に、最も重症度が高く多種多様な患者が入院する、地方都市の急性期病院の一般病棟 7 対 1 入院基本料算定病棟の看護部門を対象に、職務満足と効率性の関係を明らかにした。

本論文の各章の内容は以下の通りである。

第 1 章では、医療体制の変化とともに、看護業務の位置づけがいかに変化したかを述べ、その諸問題点について整理するとともにその諸問題の解決策を提示することを本論文の目的として示している。

第 2 章では、まず、業務量調査結果を「療養上の世話」、「診療の補助」、「周辺業務」に区分して集計分析を行い、全病棟において「周辺業務」の割合が最も高いことを明らかにしている。さらに、急性期病院における看護業務の変化を明らかにするため、経年的に比較検討し、看護業務において、ボトルネックとなっている業務（すなわち「周辺業務」における「記録業務」）を抽出し、その改善案として同業務の標準化、適正化を図るとともにタスクシフティング、タスクシェアリングを進めるための課題を明らかにしている。

第 3 章では、第 2 章で明らかとなった看護業務の実態を踏まえ、これまで看護分野では応用されていない DEA 分析を用いて、急性期病院の上記病棟の看護業務の効率性を測定し、病棟間の効率性の違いを明確化している。さらに、ベストプラクティスに近づくための改善案として入力変数である「周辺業務」の削減および「超過勤務時間」の縮減などの提言を行い、その削減率、縮減率は病棟ごとに異なることを明らかにしている。

第 4 章では、対象施設の看護業務の効率性について、その経年変化を見るために、Malmquist 指数を用いた分析を行っている。2009 年度から 2 年おきに Malmquist 指数を測定してその変化を俯瞰し、さらに、2009 年度から 2017 年度を前期（2009~2013）と後期（2013~2017）の 2 期に分けて、各期における技術効率性およびフロンティアシフトが向上するかまたは減退するかにより、病棟群を比較検討し、それらの経年変化の特徴を明確化している。

第 5 章では、急性期病院の一般病棟 7 対 1 入院基本料算定病棟に勤務する看護師に焦点を絞り、その職務満足と仕事の継続意思及び仕事に対する認識について分析を行っている。中山式職務満足測定尺度を用いて、個人的因子と管理システムや職場の人間関係などの組織に関わる因子、看護師としての自己実現や専門職としての働きに関わる因子が、仕事の満足度とどのように関係しているかについて検討を行っている。

第 6 章では、第 5 章で明らかとなった看護師の職務満足度測定結果と、第 3 章で DEA を用いて求めた上記病棟の効率性との関連性を明らかにしている。

第 7 章では、本研究の全体的な総括を行うとともに、残された課題についての整理を行っている。本研究は、急性期病院の看護業務量調査を用いて、看護業務の効率性の測定と諸問題の解決策の提示をするとともに、その効率性の高さと職務満足度の関係を明らかに

することが目的であるが、上記 7 章を通して、かなりの部分達成できていると評価できる。

また、本論文の「博士学位論文の審査基準」の独創性、新規性、貢献度、論証可能性、論文の完成度についての評価は以下の通りである。

① 独創性、新規性

従来の医療機関による看護業務量調査（タイムスタディ）による ABC 分析に加えて DEA を用いることにより、看護業務の効率性を効率値に基づいて評価した本研究はこれまでにない独創性を持ち、さらに医療機関の経営効率性の評価には用いられてきた DEA を看護業務の病棟間の効率性比較に適用した例はなく、新規性があると認められる。

② 貢献度

看護業務量調査に DEA を組み込む新しい手法を構築したことで、看護業務量の効率性を効率値により評価できるのみならず、業務改善の道筋を具体的に提示できるようになったことは、看護業務の可視化への多大な貢献である。また、従来の職務満足度調査では、職務満足の向上につながる要因の抽出が進まないのが現状であるが、業務量調査の結果と病棟の業務の繁忙度を示す変数を用いた DEA 分析を組み合わせることで職務満足と効率性の両面から看護部門の現状把握可能な手法を構築でき、今後の看護管理における有用な手法を提示できた点が本研究の意義である。

③ 論証可能性

看護業務量調査に基づく病棟の効率性評価のための評価値の導出、およびフロンティアに近づくための改善案の提言は、DEA を用いて行っており、さらに、効率性の時系列分析は Malmquist 指数を用いて行っており、それらの論証可能性は保証されている。また、統計手法を用いて、DEA の効率値と中山式職務満足測定尺度との関係を導出しているので、論証可能性は担保されている。

④ 論文の完成度

予備審査の際に指摘された点について、適切に改善が行われており、論文の完成度は一定の水準を満たしている。あえて不十分な点を挙げるとすれば、第 4 章における効率性の経年変化分析が、本論文の目的である業務効率性と職務満足の関係の解明にどのように寄与するのかについての論述が、やや不足している点が挙げられる。

以上の評価により、本学位審査委員会は、本論文が学位審査基準を満たすものと判断し、全員一致で博士（経営学）の学位に値するものと判断した。